

氏名： 浜口 順子 (HAMAGUCHI(TAKEUCHI) Junko)
所属： 人間文化創成科学研究科人間科学系
学位： 博士(人文科学) / Dr.(Human Science)
職名： 准教授
専門分野： 保育学、幼児教育学
E-mail： takeuchi.hamaguchi.junko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

保育／理解／実践／教員養成／言葉
Early childhood Education / Understanding / Practice / Teacher Education / Discourse

◆主要業績

総数(8)件

- ・「育ち」観からの保育者論、風間書房 2008
- ・浜口順子・佐治由美子・塩崎美穂・菊地知子、保育を「見る」目を育てる—お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」による保育現場と大学との協働的カリキュラム開発研究報告(2)— お茶の水女子大学人文科学研究4、2008
- ・保育における「別れ」、幼児の教育 106-12、フレーベル館、2007、20-26
- ・佐治由美子・浜口順子、「保育臨床実習」の授業改革、幼児の教育 106-2、フレーベル館、2007、52-57
- ・浜口順子・佐治由美子・刑部育子、保育者の資質向上をめざした保育現場と大学の共同研究(1)—学生の観察授業におけるiSD方式の記録の活用—、日本保育学会第60回大会発表論文集、2007、790-791

◆研究内容 / Research Pursuits

- 1) 特別教育研究経費「幼保の発達をみとおしたカリキュラム開発」プロジェクトリーダーとして、附属幼稚園・附属いずみナーサリーと大学との共同研究を推進。具体的には；
 - ①本大学の保育・幼児教育研究リソースの共同的研究システムの開拓
 - ②総合的保育者養成にむけてのカリキュラム改革と授業実験
 - ③学外の保育リソースとの協働的関係の開拓(文京区幼稚園との新しい授業協力、ドイツの幼保一体化施設の視察など)
- 2) 戦後の保育研究における「生活」概念の意味の変化とその研究方法
- 3) 保育・幼児教育専門誌「幼児の教育」(月刊)の編集主幹として、家庭・幼児教育の現場における本誌の役割と効果について検討し、現代の保育関係者に貢献する研究的メディアの方向性を探る。附属図書館の協力を得て、本誌の内容(明治34年創刊号から100年以上のバックナンバー)をリポジトリとしてIT公開が実現する(平成20年6月~順次の予定)。
- 4) 学位論文の修正版を出版した。「育ち」概念の変化の意味を問い、その上で保育者の存在論を4つの相(言葉、枠組み、文脈、構え)から検討した。
- 5) タカラトミー玩具に関するアドバイス監修プログラム(いずみナーサリー)への助言。

◆教育内容 / Educational Pursuits

「発達臨床基礎論Ⅱ」において、幼保プロジェクトの講師と共同で身体的総合的な子ども・児童理解をめざし、ワークショップ、特別支援学校における実習、学外の講師による特別授業などを試みた。「保育臨床実習」は、附属2園に加えて、文京区の10園の公立幼稚園に協力を依頼し、観察を始めた(成果は紀要等で報告)。「保育学」「保育課程論(教職)」では、0～2歳の発達との連続性や幼小連携について配慮し、また赤ちゃんとその母親に参加してもらったり、絵本を省察的に読んだりする(専門の講師による)などの体験的な学びプログラムを企画実行した(文科省「初等教育資料」2008.6月号に掲載予定)。

卒論は2名指導(内容:特別支援学校における実習生としての学びの変化、附属小学校児童の「道草」の研究)のほかに、保育・児童系の教員ゼミは年3回の合同ゼミによる共同的な指導を行った。大学院においては、保育・幼児教育関係の資料・文献を読むと同時に、現場における観察や参加もしくは職業的実践を交換し、研究に実践を生かし、実践を研究に生かす方法を検討した。修論は主査1、副査1。

◆研究計画

- 1 食育、女性、自然教育などに関する学内の研究リソースと対話しながら「幼保プロジェクト」研究のコンセプト、附属ナーサリーの位置づけについて、学内・外の関心を広げるための具体的なプランを実現させていきたい。
- 2) アジア、欧米における保育者養成と結びつく次期のプロジェクトにむけての研究計画を想定して、海外視察(英、独、トルコ、韓国など)と具体的な交流を着実に継続させていく。

◆メッセージ

お茶大は(いい意味でもわるい意味でも)わが国における現在の保育・幼児教育およびその研究の基盤を築いてきた場所です。今という時代は、人を育てるということについて、もう一度基本から、そして子どものいるその場所から考えることが求められているのだと思います。保育の現職者を受け入れる枠(大学院の保育・教育支援コースやチャイルドケア・アンド・エデュケーション講座など)も充実しており、附属園も2つ、キャンパスの中にあるので、子どもとも現場の人とも一緒に学ぶことができます。先生にならなくてもいいのです。「大人である」ことを真面目に考えること、それが本当の保育学であり児童学だと信じています。